

東北復興日記



まだまだ

▶▶▶ 239



東北工業大学教授
大沼正寛さん

震災後、集落調査や漁村の番屋づくり、建築保存活動などに関わりましたが、基盤整備が進む一方で、地域の課題の根本は未解決のままだと感じています。とくに、職住分離には疑問を持っていません。この地に生きる意味は、価値を生み出す生業や、ともに暮らす家族や地域社会によって確認されると思っからです。

した。
次回以降のこのコーナーで、研究企画の特定課題である天然スレート瓦や丸森町のシルク関連の取り組みや、各地の産物が集まる「市」の可能性とこれまでの歩みについて、それぞれご紹介頂きます。
天然スレートは、東京駅舎の屋根にも葺かれていた石です。西洋では一般的な屋根材で、明治以降の洋風建築には必ずといっていいほど用いられました。その起点は宮城県石巻市雄勝町。明治初期、すずりの石材が同質であることに気づき、学制公布にあわせて学童用石盤の国産化を図ったのが始ま

コアトリエと生活景

そこで、「コアトリエ」という概念を着想しました。コはCO＝共同を意味します。地域に根ざした小さな生業の場をアトリエと見立て、それらの連携・共創をめざすものです。この研究企画は「農山漁村共同アトリエ群による産業の再構築と多彩な生活景の醸成（通称・この地に技ありプロジェクト）」として、科学技術振興機構の社会技術研究開発センターに採択頂き、宮城大・秋田公立美術大とともに取り組むことになりました。

りでした。

すずりから文具、そして建材へ。今回の津波で、沿岸部は壊滅的な被害を受けましたが、雄勝の一部や本吉入谷、登米、陸前高田など、陸前地方には二千棟以上のスレート家屋が残されています。国内唯一ともいえる広域景観は保全が望まれますし、屋根下には多彩なコアトリエの生活景が映えてほしい。だからこそ、地域に根ざした「技あり」な事例をソフト・ハード両面から拾い上げ、存続のモデルを描いてみたいのです。



研究開発プロジェクト 季刊レポート

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。